

研究ノート

日本蒐儲の中国古封泥について

On Some Sealing-Clay Pieces of Ancient China from Collections in Japan

高久由美*

TAKAKU Yumi

キーワード：封泥、『印印』、聽冰閣、園田湖城

Key words: sealing-clay piece, Qin-Han dynasties

はじめに

2009年7月、国立新美術館（東京都港区）において篆刻家・松丸東魚（1901～1975）の回顧展「篆刻家松丸東魚の全貌－搜秦摹漢の生涯－」が開催され、諮問委員の一人として出陳品の選定作業に参加する機会を得た¹。その遺品を整理している過程で、戦前の日本に将来され、個人の収蔵品となったまま発表されることのなかったいくつかの封泥コレクションを発見することができた。一つは、京都の園田湖城（1886～1968）を中心に活動していた篆刻結社、同風印社社友旧蔵のいくつかの封泥の存在である。もう一つは、東京の三井高堅（1867-1945）蔵とされる封泥の原拓冊の発見である。京都、東京いずれでも、それら封泥の実物の存在は殆ど確認できないが、以下に今日残された拓本及び写真等に依りながら新資料の概要を紹介し検討を加えることとする。

一 封泥の出現とその日本への将来

清の道光二年（1822）に四川で初めて「封泥」が発見され、呉栄光がこのうち6枚を“漢印範”（漢印を鑄造した際の陶範）として『筠清館金石文字』（1842年刊）に著録してから、二百年近い歳月が経過しようとしている。その間、中国では陳介祺、吳式芬、羅振玉、王献唐、周明泰ら数多くの名だたる収蔵家や金石学者たちが、精力的にこれら出土品の蒐集につとめ、『封泥考略』

* 新潟県立大学国際地域学部 (gaojiu@unii.ac.jp)

(1904年)を始めとする幾多の封泥著録が編まれた。

早くから日本に将来された実物も少なくない。20世紀前半の将来品で、今日知られる日本最大のコレクションは、東京国立博物館の蔵品634枚、次いで大谷大学の蔵品262枚である。前者の大部分を占めるのは、『封泥考略』所収封泥のうち、陳介祺旧蔵とされる封泥556枚であり、これらは陳氏の歿後、原田悟朗(1893~1980)を介して、昭和初期の日本の財界人であった、阿部房次郎(1968~1937)によって、昭和10年(1935)に東京国立博物館に寄贈された²。後者は、大谷瑩誠(1887~1948)による蒐集品で、現在は大谷大学博物館の禿庵文庫に収められている。従来は羅振玉の旧蔵品と伝えられていたが確たる根拠はなく、当時の資料によれば、昭和6年(1931)時点で262枚のうち162枚は園田湖城氏の旧蔵品であったことがわかっており、残りの100枚については、大谷氏の蔵品であったこと以外にその来歴を窺わせる資料はないという³。公共機関の収蔵品としてはこの他に、台東区立書道博物館に中村不折の旧蔵品が20枚、藤井有鄰館に8枚の封泥が収まっているとの報告があるが、前者は未公開品、後者はいずれも偽物とされている⁴。

新中国成立後は、各地の遺跡から断続的に出土したものもあったが、1990年代に至り陝西省西安市西家巷地区において、数千枚を超すとされる大量の秦封泥の出土が陸続と伝えられたことは記憶に新しい⁵。これら新出封泥は中国古陶文明博物館(北京市)や中国書法藝術博物館(陝西省西安市)などの蔵品となったほか、一部は日本にも伝わっており、個人収蔵家以外では、古河市立篆刻美術館(茨城県)の80枚⁶、観峯館(滋賀県)の153枚⁷など、公共機関の蔵品となっているものも多数ある。21世紀に入ってから、山東省臨淄市の齊国故城や、江蘇省徐州市の土山漢墓、河南省平輿県古城村などの地から、秦漢封泥の出土が相次いで報告されている⁸。また、河南省新蔡故城より戦国時代の楚封泥出現が報じられ⁹、封泥研究はこれまでの蓄積に加え、さらに一層の深まりを見せつつある。

二 『印印』所載同風印社社人所蔵封泥

『印印』は、京都在住の篆刻家、園田湖城の篆刻結社、同風印社の社誌として大正5年(1916)に第一輯が刊行され、昭和26年(1951)までの三十五年間に全82冊が刊行された。同誌は、門下の同人の篆刻作品を掲載する以外に、関係者が所蔵する中国日本の名蹟、佳品を毎号の巻頭に紹介するのを常とした。園田氏蒐集の古璽漢印はいうにおよばず、全巻中で何度かにわたり封泥も紹介

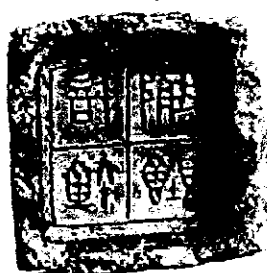
されており、誌上に掲載された年代順に掲げると表一のようなになる。これらの封泥および古陶は、1931年から1946年の間に発表されたものであり、東京国立博物館のコレクションがやはり1934年に阿部氏を通じて同館に寄贈されたことと併せて考えると、これとほぼ同時期に中国より日本に将来されたものと考えられる¹⁰。後述の三井高堅蔵の封泥と同じく、この時期少なからぬ日本の収蔵家が、古銅印のほかに中国古封泥を購入していた。

表一 『印印』 所載同風印社社人所蔵封泥

図版 番号	掲載巻号	刊行年月	件名	所蔵者	備考
印1	『印印』 第11輯	1931年1月	西漢封泥「逕侯国丞」	園田湖城	
印2	『印印』 第22輯	1934年9月	戦国封泥「□鯁信鉢」	不記所蔵者	偽
印3	『印印』 第23輯	1934年12月	戦国封泥「龍城戡鉢」	不記所蔵者	偽
印4	『印印』 第24輯	1935年1月	戦国封泥「曄司馬」	不記所蔵者	偽
印5	『印印』 第33輯	1937年8月	西漢封泥「嚴道令印」	谷聴泉	
印6	『印印』 第36輯	1938年5月	秦封泥「潁川大守」	園田湖城	
印7	『印印』 第37輯	1938年9月	古陶「鄭埭市鉢」	園田湖城	
印8	『印印』 第43輯	1940年1月	斗検封「官律所平」	黄龍硯斎氏 ¹¹	非封泥
印9	『印印』 第65輯	1945年10月	古陶「左廩漚鉢」	不記所蔵者	偽
印10	『印印』 第70輯	1946年12月	「大田男□」	不記所蔵者	非封泥

(一) 戦国封泥 三枚 (図一)

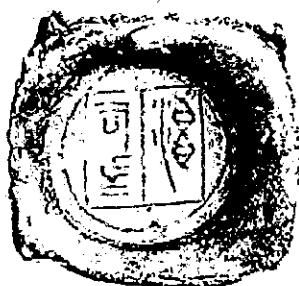
『印印』には収蔵者は記されていないが、1934年9月以降連続してまとまって紹介されていることから、おそらく一人の収蔵品であろう。封泥の形状や裏面の様子など、疑うべき点が多く、或いは古銅印を鈐印して新規に作製されたものかもしれない¹²。このうち、「□鯁信鉢」(印2)と「曄司馬」(印4)は、古銅印譜中に未見である。「龍城戡鉢」(印3)の龍城は現在の安徽省蕭県で、陳介祺旧蔵印中にこれと同文の古銅印(璽彙0278)が存在したが、本封泥とは別印である。あるいはこの印影に依り作製された模印の封泥かもしれない。



印2 口鯀信鉢



印2 背面



印4 司馬



印4 背面



印3 龍城戩鉢



印3 背面



璽彙 0278

図一 戦国封泥

(二) 戦国陶文 二点 (図二)

「鄆埭市鉢」(印7)と「左廩潯鉢」(印9)は、1938年と1945年に『印印』に掲載された陶文だが、両片と同文の陶片2点が、1930年に黄賓虹が刊行した『陶璽文字合証』中に、印文が一致もしくは類似する古璽とともに掲載されている。

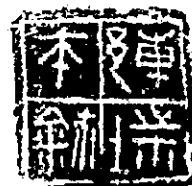
「鄆埭市鉢」(印7)の第一字の鄆は、地名で、現在の山東省泰安市に在る。第二字[埭]は臨淄陶文に埭(陶彙3.649)、埭(陶彙3.731)などいくつか用例があるが、裘錫圭氏はこれを土に従い市に従う埭に隸定して“市”と釈し、市



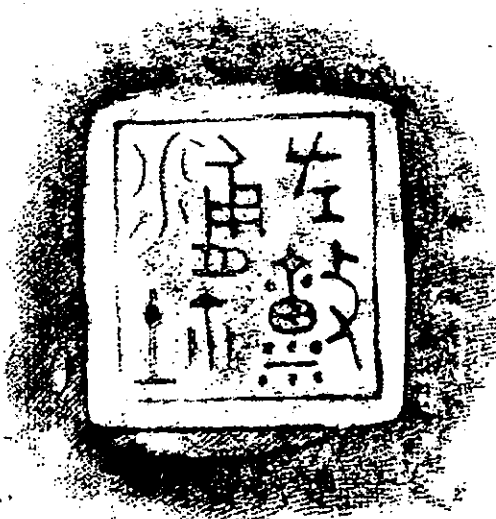
印7 鄒埤市鉢



合証 (陶)



合証 (璽)



印9 左廩浦鉢



合証 (陶)



合証 (璽)

図二 戦国陶文

師とは“一市の長”と解す¹³。合証に掲載された古銅印と陶文は、第一字の左旁下部を湾曲させて𠂔、第一字右旁を𠂔と作るのに対し、本陶文は第一字を陳国の陳とみなしたためか𠂔、𠂔と作る。合証所載古銅印は、故宫博物院の蔵品中に見出せたが(璽彙0152)¹⁴、本陶文が当古銅印によって作製されたもので

あるか否かは今後の厳密な検討を要する。「左廩涌鉢」（印9）も同様に、黄賓虹『陶匱文字合証』に著録された陶文（陶彙3.645に複製所収）によるものであるか否かの検討が必要であろう。

（三）秦漢封泥 三枚（図三）

「潁川太守」（印6）は田字格の封泥である。『漢書』地理志に「潁川郡、秦置」とあり、秦から置かれていた潁川郡の太守の官印封泥である。『封泥考略』に著録され現在は東京国立博物館の蔵品となっている「潁川太守」封泥があるが、同文であるにもかかわらず界格がなく、年代は西漢中期とされていた（漢彙考371）。太守封泥は、かつては『漢書』百官公卿表に「郡守、景帝中二年（B.C.148）更名太守」とあるのに依拠して、西漢初期に太守という官署が設けられて以降のものと考えられてきた。田字格を有する太守封泥には、このほか、即墨太守（齊）、河間太守（齊）、清河太守（齊）、潁北太守（続）などがあるが、いずれも20世紀初めに齊魯の地から出土したものである。また、近年西安相家巷より出土した秦封泥のひとつに「四川太守」封泥があり、これも田字格を有している。このことに加えて、雲夢睡虎池秦簡中にも「成都上恒書太守」（封診式・遷子）として「太守」の名が現れることから、戦国時代の秦では郡守（郡の長官）の尊称として「太守」と称されることがあったとする結論が導かれた¹⁵。したがって現在では、清河太守（齊）、潁北大守（続）もまた、秦封泥に分類されている（秦彙考1587、1588ではこれらを秦封泥として収録）。『漢書』百官公卿表の記載にもかかわらず、「潁川太守」のように、同文でありながら田字格と無疆格の封泥が存するのは、官職名の呼称が秦漢で異なっていたことのあらわれであると解してよいだろう。

「逕侯国丞」（印1）の第一字は酉に从い辵に从う。『説文解字』に「逕、迫也。从辵酉聲。逕或从酋」とあり、逕とも作る。『漢書』地理志には「涿郡…県二十九…逕」とあり、現在の河北の地に当る¹⁶。

「嚴道令印」（印5）は、『漢書』地理志に「蜀郡…県十五…嚴道」とあり、漢の蜀郡に置かれた道官印である。十九世紀中頃、四川より出土し吳榮光によって初めて世に知らされた封泥印文に既に「嚴道」の地名が現れている



印6 穎川太守



東博No.133



印1 通侯国丞



印5 嚴道令印



東博No.265

図三 秦漢封泥

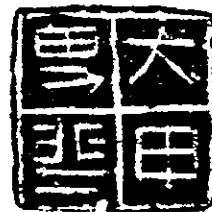
(『筠清館金石文字』巻五、59所載)。なお、『封泥考略』に著録された同文の封泥が現在東京国立博物館の蔵品となっているが、本封泥とは別印である。

(四) その他 二点 (図四)

斗検封「官律所平」(印8)は左文陰刻の拓本である。「大田男□」(印10)の第4字は未詳である。



印8 官律所平



印10 大田男□

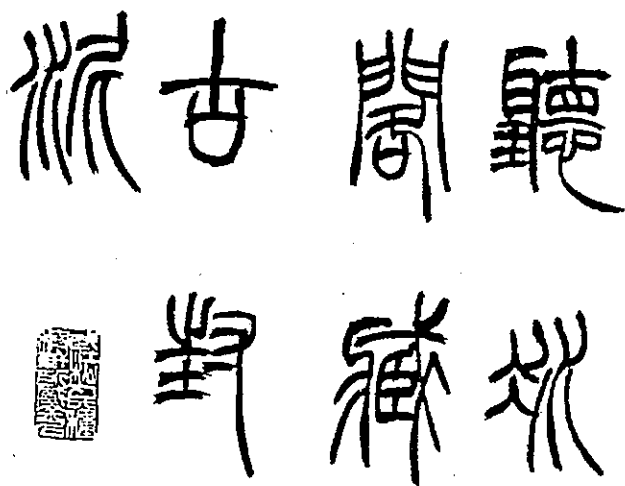
図四 その他

三 三井聽冰閣藏封泥

これまで刊行された印譜解題等には採りあげられたことのない封泥の著録である。おそらく松丸東魚旧蔵の本冊が天下唯一の孤本であろう¹⁷。帖装一冊の原拓冊で、題簽及び第一帖には、松丸東魚の筆で「聽冰閣藏古封泥」と墨書の題字があり（図五）、以下各帖に拓本二十三枚が貼りこまれたものである。このうち、第4拓「齊樂府印」の右下隅に、「聽冰所藏金石」の朱文印の鈴印があるが、これは河井荃廬（1871～1945）が明治40年（1907）に三井高堅のために刻したものであることがわかっている（図六）¹⁸。荃廬はこの印の刻年を数年溯る明治36年（1903）に、京都から上京、高堅の聘に応じて千代田区九段の三井家の敷地内に居住するようになっている。このことから推測するに、この封泥の拓本は、三井高堅の傍らで文物蒐集の助言者的な役割を担っていた、河井荃廬の手により採られたものである可能性が高い。かつ、河井荃廬と松丸東魚との交友関係から、その拓本を東魚が入手した時期を推測するに、それが昭和14年（1939）以前であったことはほぼ間違いないだろう¹⁹。

また、本帖の東魚自身の題字の左隅には「武江松丸氏種穀軒所藏金石」の鈴印がある。該印は、昭和三十六年（1961）に毎日書道展に新作出陳されていることからすれば、当冊を帖装して題字を記したのはそれ以降のことであろう。

所収拓本の数は一冊全二十三紙で、内訳は、封泥が二十一枚、斗検封が二顆である（図七）。



図五 松丸東魚題字『聽冰閣藏古封泥』（縮小）



図六 河井荃廬刻印(実寸)



図七 三井聽冰閣蔵封泥

表二 三井聽冰閣蔵封泥

図版 番号	件名	『集成』番号	旧著録	備考
聽1	佐軍司馬	無		疑偽
聽2	齊御史大夫	217-218	齊 統 建	
聽3	齊内官丞	309-322	齊 統 建 真 臨 澂	
聽4	齊樂府印	340-342	齊 統 臨 澂	
聽5	齊司徒丞	無		
聽6	齊御府丞	376-377	齊 再 澂	
聽7	齊官司丞	351-362	齊 統 建 真 臨 澂	
聽8	齊鉄官印	448-453	齊 建 真 臨 澂	
聽9	臨菑守印	528-529	齊 統 建	
聽10	広侯邑丞	1199-1201	統 建 真 臨	
聽11	騶之右尉	1582-1588	齊 統 建 真	
聽12	市府	2215-2216	齊 統 建 澂	偽/有新出封泥
聽13	司空	2172-2181	封 齊 建 真 臨 澂	有新出封泥
聽14	騶丞之印	1460-1468	封 建 真	
聽15	騶丞之印	同上	同上	
聽16	安平郷印	1726-1738	齊 統 建 真 臨	
聽17	東閭郷印	1778-1785	齊 統 建 真 臨	
聽18	南□郷印	待考		
聽19	□郷之印	待考		
聽20	猶郷	1996-2002	齊 統 建 真 臨	
聽21	彭鑄為識		秦漢金文録	非封泥
聽22	官律所平		秦漢金文録	非封泥
聽23	臣華	無		

「佐軍司馬」（聽1）は、史籍に官職の記載がなく、佐軍とはなんであるか不明であるが、あるいは軍旅を幫助する、の意であろうか。『後漢書』卷69竇何列伝に「是時置西園八校尉、…上軍校尉、…中軍校尉、…下軍校尉、…典軍校尉、…助軍校尉、…佐軍校尉、又有左右校尉」とあり、また『後漢書』卷74袁紹劉表列伝には「以紹為佐軍校尉」とあることから、後漢の時代には佐軍校尉という官職があったことがわかる。二字が逆転した「軍佐之印」という印文を有する封泥があるがこちらは偽物かと疑われる（封泥彙編5葉）。漢官印に「營軍司馬」（徵存0158）「監軍司馬」（彙考213）などあり、曹魏官印には「助軍司馬」（徵存1312）があるが、「佐軍司馬」は例がない。文字も漢篆に

は類がなく、偽物である可能性が高い。

「齊御史大夫」(聴2)「齊内官丞」(聴3)「齊楽府印」(聴4)「齊御府丞」(聴6)「齊宮司丞」(聴7)「齊鉄官印」(聴8)はいずれも、『齊魯封泥集存』や『臨淄封泥文字』などに同文の封泥が既に著録されており、19世紀から20世紀にかけて山東の地から多数出土した齊国の官印封泥の一部が、日本にも流入したものと考えられる。「齊司徒丞」(聴5)のみ、旧著録に同文封泥が見えないだけでなく、史籍にも記載が見えない。

このほか、「臨菑守印」(聴8)と「廣侯呂丞」(聴9)は、『漢書地理志』に「齊郡、秦置。…縣十二。臨淄…廣…」とあり、いずれも臨菑、廣という漢代の齊郡に属す縣で、山東の地から出て『齊魯封泥集存』や『臨淄封泥文字』などに著録されたものである。ともに同文の封泥が上海博物館に所蔵されており、「臨菑守印」は西漢早期、「廣侯呂丞」は西漢晩期のものと考えられている(漢彙考635、1136)。

「騶之右尉」(聴11)、「騶丞之印」(聴14、聴15)の騶は、『漢書』地理志によれば、「魯国…県六…騶、故邾国」とあり、これも今の山東省鄒県にあった地名である。

半通印「市府」(聴12)は、漢彙考1317によれば、市易を管理する官署とある。諸侯国である齊の国からの出土によって、齊国でもまた多くの市が設けられていたことがわかる²⁰。「司空」(聴13)もかつて山東より多数出土したのみならず、新出の封泥中にも現れている。「安平郷印」(聴16)、『漢書』地理志に「涿郡…県二十九…安平」とある。「東閭郷印」(聴17)は史籍に記載がない。ともに漢初の郷印封泥である。また、「南□郷印」(聴18)も、第二字が判然としないが、かつて山東より出土した封泥に「南成郷印」(『集成』1795-1797)「南陽郷印」(『集成』1798-1803)などの郷署印があり、第二字は成または陽字であるかもしれない。「□郷之印」(聴19)の第一字は判然とせず、具体的に何処かは不明である。

おわりに

清末に巴蜀や漢中、そして齊魯の地などから封泥の発見が伝えられてから20世紀初頭までの比較的短い間に、これらの地域で陸続と封泥が出土したことは、この時期精力的に編纂された数多くの封泥著録からも明らかである。そして、出土した封泥の一部は、20世紀前半に日本に齎されて公私の収蔵家の蔵に帰した。これは、20世紀前半の日本における中国古銅印の蒐集熱に便乗する形とも

いえ、本稿で紹介した園田湖城、谷聴泉、河井荃廬そして松丸東魚の諸氏はいずれもこの時期の日本を代表する篆刻家であった。

園田氏は日本有数の中国古印の収蔵家として聞こえた人物であり、『平盒蔵古鈐印』（1935年）、『平盒古官印偶存』（1955年）など自らのコレクションを印譜に編んだ。中でも1969年に刊行された『平盒攷蔵古璽印選』は、晩年の蔵印641方を収めたコレクションの集大成ともいえる。これらはその後大阪の和泉市久保惣記念美術館の蔵に帰したが、『印印』に掲載された封泥や古陶文は含まれておらず、その後何処に収まったかは知るべきがない。

三井聴冰閣蔵封泥は、河井荃廬がこれを三井家敷地内にあった居宅の中で預かっていた可能性が頗る高い。河井氏は、1945年3月10日から11日払暁の東京大空襲の折、一旦は避難したもののその後家族をおいて一人居宅の様子を見にもどり、業火の中、居宅にあった大量の書画などの文物と運命をともにした。焼跡から拾われて後に東京大学東洋文化研究所に収まった三井高堅旧蔵甲骨の運命から類推すれば、これら封泥もその時に一緒に灰燼に帰したのかもしれない。もし戦火を免れたとすれば、三井記念美術館または三井記念文庫の蔵品となっている可能性が高いが、その所在は現時点で確認できていない。

【付記】

本稿で取り上げた新資料については、2010年11月、中国浙江省杭州市で開催された戦国秦漢封泥文字国際学術研討会（西泠印社主催）において松丸道雄先生と共同で「中国古封泥在日本－介绍二十世纪上半传到日本的几批中国古封泥－」として研究報告をおこなった（西泠印社、中国印学博物館編『青泥遺珍』西泠印社、2010年11月、158頁～166頁）。本稿は、その研究報告を日本語に改めた上で新資料を加え、加筆、修正したものである。

注

- 1 毎日書道展特別展示「篆刻家松丸東魚の全貌－搜秦摹漢の生涯－」、2009年7月8日から8月2日まで、国立新美術館（東京都港区）において開催。
- 2 なお、阿部氏からの寄贈品586点のうち、陳介祺旧蔵封泥が555点、呉式芬旧蔵封泥が1点、合計556点が『封泥考略』所収封泥と合致している（東京国立博物館編『中国の封泥』二玄社、1998年）。
- 3 米田健志「大谷大学図書館禿庵文庫所蔵の中国古封泥」『大谷大学史学論究』第8号、2002年3月。
- 4 李中華「東瀛所蔵中国封泥述略」『青泥遺珍』西泠印社、2010年11月。
- 5 周曉陸、路東之、龐睿「秦代封泥的重大發現」『考古与文物』1997年第1期；路東之「秦封泥

- 図例】『西北大学学报』1997年第1期。また、近年刊行された傅嘉儀『秦封泥彙考』上海書店出版社2007年、は、伝世品とこれら出土品を網羅的に整理した秦封泥著録の集大成といえる。
- 6 松村一徳編『封じる』古河市立篆刻美術館平成10年度企画展図録、1998年。
 - 7 瀬川敬也「観峯館所蔵封泥」『観峯館紀要』第5号、2009年10月、および瀬川敬也「観峯館所蔵封泥(二)」『観峯館紀要』第6号、2010年10月。第一論文には153点のうち、22点の拓本と写真が掲載され、第二論文には68点の拓本と写真が掲載される。
 - 8 山東臨淄出土の封泥は、孫聞博・周曉陸「新出封泥与西漢齊国史研究」『南都学壇』第25巻第5期、2005年9月、によれば、数量は450枚以上、印文の種類も300を超えるという。江蘇徐州の土山封泥は、最近ようやくその一部が公表されるに至ったが、その数量は、出土番号が付されたものだけでもすでに4500番にまで達しているという(李銀徳「徐州出土西漢印章与封泥概説」『青泥遺珍』西泠印社、2010年11月)。河南平輿出土封泥は、著録され公刊された枚数が544枚、孫慰祖「新出汝南郡秦漢封泥群研究」によれば、史籍に記載のある汝南郡の封泥群である(王玉清、傅春喜編著『新出汝南郡秦漢封泥集』上海書店、2009年)。
 - 9 周曉陸、路東之「泥上之歴史与古城」『収蔵家』2003年第3期。また、周曉陸、路東之「新蔡故城東周封泥の初歩考察」『文物』2005年第1期。
 - 10 『印印』には、藤井静堂蔵や大谷禿庵蔵とされる古印も数多く掲載されており、当時の関西の蒐集家の収蔵状況を窺い知ることができる。
 - 11 黄龍硯斎とは園田湖城氏の別号である。この号を冠した『黄龍硯斎蔵古銅印譜』がある。
 - 12 泥への鈴印こそまさに古銅印の本来の用途に他ならず、園田湖城の弟子、加藤慈雨楼は後に、本格的な古銅印研究を目的として、古璽を泥に鈴印して新規に封泥を作成しこれを“新製封泥”と名づけた。加藤氏は手始めに、園田湖城旧蔵の古銅印641方から『平倉考蔵古璽印選』鈴印本12巻(1969年)を編纂した際に、併せてこれら古銅印の封泥を作成し、その巻末に封泥の拓影を付した。後に『有鄰館蔵璽印精華』(1975年)の編纂に携わった際にも、やはり新製封泥を作成して図録に登載した。これ以外に『慈雨楼新製封泥存』(1970年)の作もあり、ここで1969年に園田湖城旧蔵印から作成した封泥641点の写真が初めて発表された。のちにこれら新製封泥は九州国立博物館に寄贈された。
 - 13 裘錫圭「戦国文字中的“市”」『考古学報』1980年第3期。
 - 14 なお、裘錫圭注13前掲論文では、該印を『稽庵』に著録されるものとして引用しているが、これが孫文楷『稽庵古印箋』(1885年)のことを指すとすれば、黄賓虹が『陶璽文字合証』に採用した印影はここから出たものかもしれない。なお、『稽庵古印箋』は、小林斗庵氏寄贈中国印譜のうちの一点として、現在、東京国立博物館に収蔵されている(P-10067)。
 - 15 周偉洲「新發現的秦封泥与秦代郡縣制」『西北大学学报』1997年第1期。
 - 16 なお、『印印』には本件の収蔵者は園田湖城とあるが、米田注3前掲論文所載の禿庵文庫所蔵封泥一覧表によれば、蔵品の一つに「道侯國丞」があるという。実物は未見だが、あるいはこれと同一物である可能性が高い。だとすれば、昭和6年(1931)1月に本件が園田湖城旧蔵品として『印印』に掲載されてまもなく、本品を含む162顆の封泥が園田氏の元から大谷氏の元へ移ったということになる。
 - 17 最近刊行された『松丸東魚蒐集印譜解題』(高山節也、2008年、二玄社)の中で初めて、著録されるに至った。
 - 18 同じ年、河井荃廬は三井高堅のために「三井高堅之印」「聴冰所得金石」「三井家聴冰閣所蔵金石文字」「三井家聴冰閣蔵板記」など、実に多数の印を刻している(尚友会編『荃廬先生印存』1976年、二玄社)。
 - 19 昭和14年(1939)11月以降、ある事情からそれまで親しく行き来していた河井荃廬との交流が途絶え、それは昭和20年(1945)3月の東京大空襲で河井荃廬が死亡するまで続く。その間の経緯は「河井先生の思ひ出」『東魚文集』(松丸東魚、1977年、非売品)に詳しい。
 - 20 これらの半通封泥は、新出封泥中にも見える。孫聞博・周曉陸注8前掲論文。

【引用文献略号】

- 封 吳式芬・陳介祺『封泥考略』1904年
齊 羅振玉『齊魯封泥集存』1913年
統 周明泰『統封泥考略』1928年
再統 周明泰『再統封泥考略』1928年
建 周明泰『建德周氏藏封泥拓影』1928年
封彙 吳幼潜『封泥彙編』1931年
存 北京大学研究院文史部『封泥存真』1934年
臨 王献唐『臨淄封泥文字』1936年
澠 陳宝琛『澠秋館藏古封泥』1936年
徵存 羅福頤『秦漢南北朝官印徵存』1987年
漢彙考 孫慰祖『兩漢官印彙考』1993年
集成 孫慰祖『古封泥集成』1993年
秦彙考 傅嘉儀『秦封泥彙考』2009年